

## ●新春エッセイ●

# 短歌とオリンピック

俵万智

オリンピックイヤーである。マラソンの会場が、直前に東京から札幌へ変更されるなど波乱含みではあるが、始まってしまつと、けっこう盛り上がるのではないかと予想している。ラグビーのワールドカップの熱狂も記憶に新しい。『サラダ記念日』に、次の一首があるというだけで「観戦記を書きませんか」というお誘いを受けた。

奪い合うことの喜び 一身に集めてはずむ

ラグビーボール

ルールもロクに知らないのでと丁重にお断りしたが、開幕してからはちよつと後悔した。もし引き受けていたら、めっちゃいい席で見られたんとかやう？ と「にわかファン」(流行語大賞ノミネート)は思ったのだった。

1964年に開催された前回の東京オリンピックは、「筆のオリンピック」とも言われた。新聞や雑誌に寄稿した作家や詩人、評論家の顔ぶれを見ると、なるほどと思われる。井上靖、遠藤周作、大江健三郎、

小林秀雄、杉本苑子、松本清張、三島由紀夫……。詩人では草野心平、佐藤春男、谷川俊太郎、村野四郎……。これも、ほんの一部である。当時テレビが普及して、映像の迫力や速報性に対抗すべく、文学者による筆の力が求められたようだ。

『東京オリンピック 文学者の見た世紀の祭典』(講談社文芸文庫)や『1964年の東京オリンピック 「世紀の祭典」はいかに書かれ、語られたか』(河出書房新社)などを読むと、多少の温度差はあるものの、「始まったからには」という祝祭ムードに包まれていたことが伝わってくる。

いっぽう意外なことに(また、少しほつとさせられることに)、けっこう批判の声があったらしいことも。政治との絡みや利権問題、平和を謳うことの欺瞞について、辛辣な意見もある。

歌人は、どうだったのだろうか。掲げた二冊には短歌の掲載はない。が、縮刷版で

調べてみると、朝日新聞が詩人、歌人、俳人に積極的に依頼したようだ。

宮終二は「ああ平和」と題して次の三首。  
秋ふかむ日本の空あかあかとオリンピックア  
の火むらだちて燃ゆ

・新しき古き国々に旗すべて未来を示しひるがえり鳴る

・よるこびの空の羽音「種の別」のあらぬ祭に鳩群れて翔ぶ

手堅くまとめられているが、一首、二首、三首と進むにつれて、自由な歌いぶりになっていく。国の歴史に関係なく、また民族や人種の別なく集うことの意義に、心が寄せられているのがわかる。一番の感慨は、タイトルにあるのかも知れない。

近藤芳美は「こだま―代々木総合体育館」と題して三首(三首目、コピーがうまくとれず、潰れてしまった漢字は※で記した)。  
・この達成を吾ら民族のものとして夜空に  
白し並ぶスタジアム